

名古屋女大家政 ○石原久代 名古屋女大短大 栢原きみえ
 福山女学園家政 福山藤子

目的 被服の色、柄が着装者の個性に適合しているか否かは、服装の美的価値を大きく左右するものである。つまり同一色、柄であっても着装者の個性によって異ってくることは経験的に知られている。しかし理論的に解明されていないのが現状である。

本研究では個性のうち顔面の形態的因子を取りあげ、今回は被服の色のみにしぼり、個性と服装色との関連性について数理的に明らかにしようとするものである。

方法 本学学生222名の顔写真をもとに眉、眼、鼻、口、顔型等を類型化し、それらを組み合わせた200種の顔面について官能検査を行った結果により、強い—弱い、整っている—整っていないの形容詞対について各グループを代表すると思われる6名の被験者を選出した。各被験者に衿なしのベージュドレス（上半身）を着装させ、カラーシミュレーターにより服装色を26色に変化させたものをスライドにし、それらについて本学学生76名を検査者として、10形容詞対をSD法により5段階評定を行った。その結果を多次量解析により、各被験者について服装色がどのように影響するか検討した。

結果 上記の官能検査結果を因子分析したところ、活動、評価、力量の因子をもつ形容詞対の3グループに分類された。次に各グループを代表する3形容詞対を選出し、数量化Ⅲ類により分析した結果、高明度の色が各被験者ともよく調和し、逆に調和しにくい色としては、さえた緑、黄緑、紫などであった。また強いと感じられる色は各被験者ともに高彩度の色であり、地味と感じられる色は、個性の弱い人はグレー、個性の強い人はオリーブ、ベージュなどであった。なお各イメージには明度、彩度が大きく影響している。